

## 私と看護

私が、身近な死を経験したのは父親の死である。父親とは両親が離婚していたこともあり三歳の時から会っていなかった。私が十九歳の時叔父から電話があり父親が胃がんでもう先がなく、子どもに会いたいと言っている。という連絡をもらった。十年以上会っていない父親に会ってもどう接してよいのか分からず会うことに少し抵抗はあったが、後悔はしたくないという思いから面会に行くことを決意した。写真で見た事があり長身で大きい父親であったが、実際に会った時は自分のイメージとは正反対で、すごくやせ細っており自分よりも小さく感じた。初めはどう接してよいのか分からずお互いぎこちない感じであったが、徐々に緊張せずに話ができるようになっていった。病院まで遠かったこともあり毎週土曜日だけ面会に行くようにしていた。初めの頃、父親は車いすに乗りデイルームにて話をしてしたが、月日が経つにつれ離床を図ることが難しくベッド上座位、仰臥位にて話すようになっていった。会う度に弱っていく父親を見るのが辛く面会をやめようかと考えていた時、一人の看護師が「いつも娘さんが来てくれているのを楽しみにされてますよ。いつも遠いところからお疲れさま。」と声をかけてくださった。その言葉のおかげで私は最期まで面会に行くことができた。私は面会の際恥ずかしく、どうしてもお父さんと呼ぶことができず帰りの車の中で今日も言えなかったといつも後悔していた。

面会に行き始めて二カ月が経った頃、父親の容態が悪化しもうだめかもしれないという連絡をもらった。急いで病院に向かい病室に行くと心電図、酸素などの機器が取り付けられており父親は目を開けることなく険しい顔をしていた。私はその姿を見てベッドの足元から動くことができなかった。病室にいた看護師から「耳は最期まで聴こえてるっていうから声かけたげて。」という言葉をかけられ私は、我慢していた涙が溢れ初めて「お父さん」と声をかけることができた。その時握った手が少し動き、表情がふっと和らいだように感じた。

私の言葉が聞こえていたのかは父親にしかわからないが、私には聴こえているような気がした。この状態がいつまで続くかわからないとのことで一度家に戻った。ちょうど家に着いた時、携帯に連絡がはいり息を引き取ったという知らせを受けた。看取ることはできなかったが、なぜか後悔はなかった。

看護師の言葉がなければあの頃の私は、面会を続けることができているなかつたと思う。また、お父さんという一言を言えたこと、その時父親のわずかな変化があったことで今も後悔なく過ごすことができている。看護師の言葉は人の気持ちを楽にさせてくれたり、患者、家族の人生を変える大きな力を持っていると思う。そのため、看護をするにあたり言葉一つ一つに責任を持ち発言していきたいと思う。また、人の人生をよりよい方向へと変えていける看護師になりたいと思う。